

野のカルテ

平野文子

著 者 略 歴

1930年 7 月21日生

旧制埼玉県立忍高等学校卒業

現住所 埼玉県羽生市稲子26

詩集 野のカルテ

定価 1000円

1975年 2 月 20 日 印刷

1975年 2 月 25 日 発行

著 者 平 野 文 子

発行者 高 田 敏 子

発行所 野 火 の 会

東京都新宿区諏訪町127

印刷・製本／鎌倉印刷株式会社

詩集

野のカルテ



插画

大越英男

は
じ
め
に

高
田
敏
子

平野文子さんの作品を拝見しながら、私はいつも、そのお住いのある辺りを思います。利根川の流れるその辺り、羽生という地名の美しさも合わせて、草のそよぎや、小鳥の羽ばたきを思ったりします。

お住いの庭も緑が深く、その緑がお部屋の中にまで流れていることも想像します。

平野さんは、繊細な美しさをお持ちの方でそれは、羽生という町の自然の風景をいつも心に映していられるのではないかと思われるのです。

自分そのもののように風景を描いて、語りかけ、問いかけ、そして、求める思いも、そこに託していただけるのでしょうか。

作品のテーマは、日常のなかのさびしさを伝えていますが、そのさびしさのゆたかさ、瑞々しさに私はうたれるのです。

「川のはなし」は『野火』創刊のころの作品で、私はこの作品に強く魅かれたことを思い出します。「東京をはなれるとき」も私の大好きな作品ですが、この作品の中に、いっそう羽生の里に結ばれている平野さんが思われるからでしょう。

平野さんの細やかな情感に満ちた作品の、この十年の歩みが『野のカルテ』として第一詩集にまとめられますことを心からおよろこびいたします。

昭和五十年 早春

高田 敏子

目 次

雲雀野 12

秋の断章 14

クローバの広場 16

春暁 18

草で編んだ椅子 20

川のはなし 22

もくせい 24

昼食 26

はさみ 30

落日に 32

東京をはなれるとき 34

市の立つ町 36

十二月のなかに 40

彼岸の花 42

錠剤 44

黎明 46

亜子の秋 48

秋の肌 50

秋の衣裳	52
たたかいが終つて	54
肩かけ	56
渴く	60
姿勢	62
食後の春	64
冬を編む	66
野のカルテ	68
野	70
海の方へ	72
F夫人の夏	74
F夫人の憂鬱	76
野のカルテ	78
夕鶴	80
春のメルヘン	82
キズ	84
放浪	86
はじめに	3
あとがき	90

野 の カ ル テ

雲雀野

光る麦の畠から

明るんできた空にむかって　いま

飛び立っていったのは雲雀であらう

いつの頃からか　沈黙が快く住みついてしまった自分を

一羽の雲雀にしたててみるのは

無理かもしれない

私はいまどんなに唇をぬらしても

雲雀のように饒舌になれない

待ちわびていた春の野で 空をあおぐ

私の目から涙が流れる

あふれる紫外線の豊富さに驚いて

おそらく 私の肉体は少し老いて

冬の名残りに混濁しながら

あの雲雀の 軽やかな讃歌を

呼びもどそうとしているのだろうか

舞い上った鳥はまだ 私の視野のなかに

降りてこない

秋の断章

無花果は 先ず空に近いところの枝で熟した
それを 誰が食べるのだろう

展覧会の知らせのはがきがとどく
数年来 その筆跡は変ることがない

かりたままの書物のことを思い出す
それは「ギリシャ・ローマの神話」

初めて熟した無花果を

真先に食べるのは尾長鳥だろう

誰の手も その枝に及びはしないのだ

あなたの絵は少しずつ変り

何故 文字は昔のままで……

ギリシャ・ローマの神話は まだ読み終えない

神々の愛と勇気の物語は面白かったが

私は たくさんの神々の名を

覚えにくく 忘れやすくなった